名古屋男声合唱団　団内誌

Agora

第 33 号

2025. 4. 20

◆　第 33 号目次　◆

新たな曲作りを目指して

◆ 第３ステージ：白秋万華鏡 ― 白秋の詩による男声合唱アンソロジー ―
理解のために＜その２＞

T1.高橋昭弘　　― 1 ―

◆多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる創作曲をめざして
創作委員会への提供短歌（Agora32 号掲載追加分）　― 14 ―

第3ステージ：白秋万華鏡
― 白秋の詩による男声合唱アンソロジー ―
理解のために ＜その 2＞

高橋昭弘

2. 「追分」「びいでびいで」＝ 姦通罪事件と小笠原生活

ステージ構成としては、続いて「追分」「びいでびいで」と続くのですが、それらについて語る前に、どうしても「姦通罪事件」について触れておかねばなりません。

最初に『北原白秋詩集（下）』（岩浪文庫）の解説（安藤元雄）から、白秋詩作活動と事件との前後関係を概観しておきましょう。

2－（1）白秋にとって姦通罪事件とは何であったのか？

『思ひ出』の成功によっていわば得意の絶頂にあった二十代の白秋を突如襲った、二つの不幸な出来事について語らなければならない。一つは柳川の生家が破産し、一家が郷里を捨てて上京したため、長男である白秋が家族全体を支えなければならない羽目におちいったことである。そしてもう一つは、一九一二年、そのころ住んだ千駄ヶ谷の自宅の、隣家の人妻松下俊子との交際が、姦通罪にあたるとして俊子の夫から告訴され、収監されるに至ったことである。事件は結局示談が成立し、保釈、免訴となるが、新聞などでは驕慢な若い詩人のスキャンダルのように扱われ、白秋は深刻な精神の打撃を受けた。一時は自殺を考えるほどだったという。翌年俊子を迎えて一家で三浦三崎に移住、せっかくの雑誌『朱鷺』も廃刊し生活も困窮したが、結果的には三崎滞在が、その後の白秋をより大きな国民的詩人たらしめる契機となった。

『東京景物詩　及びその他』（「片恋」所収）は、まだこのような事件の起きる前の、明治末の「パンの会」のころに書かれた作品を集めたものである。

更に、川本三郎に拠って、少し詳しく事件の経緯を追って見ることとします。

『邪宗門』出版の一年後の明治四十三年（1910 年）九月、白秋は、市内牛込区新小川町から、府下の千駄ヶ谷原宿（現在の千駄ヶ谷駅近く）に引っ越した。

隣家には、いまふうにいえばサラリーマンが住んでいた。松下長平という国民新聞に勤める写真技師で、妻と子供がいた。

独身の白秋は、この隣家の人妻、松下俊子と親しくなった。急速に開けてゆ

く郊外住宅地での人妻との恋。現代でいえば、山田太一が描く郊外住宅地ドラマのようなものだが、現代と違って、白秋の時代には、刑法に、人妻との恋を禁じる姦通罪があった。

明治四十年に改正された刑法は「姦通罪」を設け、私的な男女の恋愛を国家権力によって制裁することになった。日露戦争の勝利によって強大になった国家の意志をあからさまに反映している。（「姦通罪」が廃止されるのは、戦後、昭和二十二年）。

刑法第百八十三条にいう。「有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ処ス其相姦通シタル者同ジ」。

「有夫の婦」と、妻の「姦通」のみを問題にしている男性中心社会の法律である。民法の家族法や相続法が、父権の徹底的優位を法制づけたのと同じである。

人妻が夫以外の男性と関係を持ったら罰せられる。相手の男性もまた罰せられる（いずれの場合も夫の告訴を必要とする）。しかも刑は「懲役」である。「姦通罪」の制定が、当時の日本人に衝撃を与えたことは想像に難くない。

松下俊子はどういう女性だったのか。

西本秋夫『白秋詩論資料考』によれば、明治二十一年、三重県の現在の名張市の生まれ。白秋より二歳年下になる。父親は漢方医。母親は佐倉藩の士族の娘。京都の府立第一高女を出、明治四十一年に松下長平と結婚、明治四十三年には長女を出産。

短歌を愛し、自分でも数多く作品を作っている。のちには斎藤茂吉に師事したという。いわば文学少女だったわけで、そんなところから彼女の方も、白秋に惹かれたのだろう。

白秋に出会った頃、その結婚生活は破綻しかけていた。藪田義雄の『評伝北原白秋』にはこうある。

当の女性松下俊子の夫長平は国民新聞社の写真部の記者であるが、一種の変質者で嗜虐性が強く、俊子は生傷の絶えることがなかった。なおいけないことは夫には混血の情婦があり、彼女は片言まじりの日本語で事ごとに俊子にわめきちらした。まだ二十二歳といううら若き身に、ひとりの乳飲み子をかかえ、泪に暮れている姿がいたく白秋の同情をひいた。背のすらりとした、ぬけるように色の白い特異な美貌は、やや日本人ばなれのした魅惑となって、坊ちゃん気質の世間知らずの、この詩人の心に喰い入った。

考えてみれば、人の妻である彼女のほうが性愛に関しては経験は豊かである。「坊ちゃん気質の世間知らずの、この詩人」に積極的であったことは充分、考

えられる。もう一つ仲が深まっていた明治四十四年という年は、雑誌「青鞜」が創刊された年であり、また、文芸協会研究所の第一回試演会としてイプセンの『人形の家』がはじめて上演され、松井須磨子のノラが大評判になった年でもある。俊子は、自分もノラになろうと、白秋との道ならぬ恋に走ったのではないか。

運命の日は明治四十五年七月五日だった。白秋と俊子は、夫の松下長平の告訴によって検事局より姦通罪で起訴されたのである。「読売新聞」が翌七月六日に「詩人・白秋起訴される」と大々的に報じ、詩壇、文壇を揺がせた。現在でもそうだが、法的な判断よりも先に、新聞にセンセーショナルに報道された時点で、白秋は、大きな社会的制裁を受けたことになる。

鈴木一郎「白秋と松下俊子ーその投獄事件をめぐって」によれば、召喚状を受けとった白秋は自身、裁判所に出頭し、翌日、予審判事より訊問を受け、その犯した罪を姦通罪と見なされて、そのまま、市ヶ谷にあった未収監（東京監獄）に送られることになった。俊子もまた、同様の処置が執られた。

収監から、二週間後、弟の北原鐵雄の必死の奔走によって、ようやく示談、免訴となり、晴れて保釈になるまで「芸術の寵児」は、夏の暑い日々を、監獄のなかで過ごしたのである。

白秋のその後の人生を語るとき、この屈辱的ともいえる受難は大きな意味を持つ。個人的には、白秋論は、『邪宗門』や『思ひ出』の成功によってではなく、この挫折、蹉跌によって始められるべきだと思う。

『邪宗門』と『思ひ出』のはなやかな白秋ではなく、姦通罪によって市ヶ谷の未収監に入れられた白秋、その打ちひしがれた白秋こそ、白秋論の原点になる。白秋は、柳川の旧家の没落から青春を始めているのと同じように、姦通事件の挫折によって、むしろ、鍛え上げられてゆく。その意味で、『邪宗門』と『思ひ出』で白秋は終わったという意見には与しない。詩的成果としては衰えてゆくというこの事件のあとにこそ、白秋の面白さがあるのだと思う。

白秋は、姦通罪の罪人になることによって、はじめて、詩人とは何か、日本の近代化のなかにあって、『邪宗門』のような、超近代のハイカラの詩を書いたことの空しさを知った筈だ。

白秋はあくまで美の世界にとじこもろうとする芸術家であり、その目は、社会や政治に向かうことはない。それだけに、姦通罪に問われた時も、姦通罪という罪の不条理を批判することはないし、恋愛の純粋さを権力に対して訴えることもない。ただ法を犯したことの怖れに打ちひしがれ、悲哀と挫折の重みに

耐えてゆく。

白秋がさっそうと自ら恋愛を肯定するほうへ向かわず、むしろ旧く不条理な法律のもとで、世間という無言の圧力に前にもろく挫折していってしまう姿のなかにこそ、「近代」というものの困難が見えてくるのではないか。吉本隆明のいう「もっと旧く暗黒のなかで葛藤が演じられる」、その「葛藤」のなかから「近代」が見えてくるのではないか。

「恋愛」と「姦通」との葛藤は、白秋にとって「近代」と「前近代」との葛藤でもあったのである。

河村政俊が指摘するように「明治四十五年七月の例の人妻との恋愛下獄事件を境に、もはや以前のような耽美享楽の夢を追ってはいられなくなったのである」（『日本近代文学大系２８　北原白秋』）「この事件を契機にして白秋は、今までの半ば趣味的な享楽情緒をかなぐり棄て、人間の真実を求めて彷徨する心の巡礼者となった」（同著）。いわば、挫折が白秋を変え、鍛えていったといえよう。

白秋はこの頃の心の懊悩を、後に詩として書き表しています。
事件の３年後、大正三年（1914）刊行の詩集『白金の独楽』から、３篇を紹介しておきましょう。

嘘

二人手ヲ取リ語ルコト、
皆イチイチニ嘘ゾカシ。
一人デ居テスラ、コノ男
己レト己レヲタバカリヌ。

自愛一篇

真実心（シンジツシン）ユエアヤマラレ、
真実心ユエタバカラル。
シンジツ口（ク）惜（ヤ）シトオモヘドモ、
シンジツ此ノ身ガ棄テラレズ。

巡礼

真実、諦メ、タダヒトリ、
真実一路ノ旅ヲユク。
真実一路ノ旅ナレド、
真実、鈴フリ、思ヒ出ス。

ここでは、真実を求めながら、自らをも欺いてしまう愚かしさを自嘲しつつ、なお、真実を求める巡礼の旅を続けねばなるまい、との思いが、切々と詠われています。この時、白秋は、この先生涯にわたり十字架を背負い続けねばなるまい、と覚悟したのだと、私は思います。

私は高校時代に、山本有三の小説『真実一路』を、いたく感激して読んだのですが、その冒頭、タイトルの下に、

真実一路ノ旅ナレド、
真実、鈴フリ、思ヒ出ス

の２行の詩句が記されていたことを鮮明に覚えています。その後肝心の本文の方はぼやけてしまったのですが、この詩句はずっと記憶に残り、折に触れ頭に浮かんでは口ずさんでいました。

それが白秋の詩の引用であり、その前に更に２行があることを、今回白秋詩集をひも解く中で知りました。山本有三の小説はそのタイトルからも想像されるように、白秋のこの詩「巡礼」に触発されて書かれたものに違いないと思います。

2－（２）三崎から小笠原へ

松下俊子との恋愛で姦通罪に問われ、世間から指弾されたあと、大正二年（1913）の一月、傷ついた白秋は、東京から逃げるように、三崎を訪れた。

神奈川県、三浦半島に位置する三崎町は、気候温暖な海の町である。東京湾と相模湾がほぼこのあたりで接する。漁業が盛んな漁師町でもある。

死ぬ気持ちでそこに行き、「海」と「光」によって、なんとか生きる力を取り戻した白秋は、その年の五月、新生を求めて、両親、弟妹、さらに晴れて結婚することになった俊子と共に、三崎に移った。

（それは）東京への決別であり、「パンの会」の熱狂に象徴される青春時代への決別でもある。東京では、単身生活が多かったが、三崎では、両親と、そして妻との生活である。もう青春の浮ついた気分は許されない。

三崎に移ったあとの大正二年七月に出版された詩集『東京景物詩』の「序言」に、白秋は次のような文章を執筆している。

「東京、東京、その名の何すればしかくかく哀しく美しきや。われら今高華なる都会の喧噪より逃れて漸く田園の風光に就く、やさしき粗野と原始的単純はわが前にあり、新生来たらんとす。顧みて今復東京のためにさらに哀別の涙をそそぐ」

こうして白秋は三崎という別天地で新たな創作活動を再開するのですが、経済的には厳しいものでした。

藪田義雄の『評伝　北原白秋』によれば、当時、白秋は東雲堂書店から出ていた文芸誌「朱鷺」の編集費として月に四十円をもらっていて、三崎での生活はこの定収入を基盤に始められた。ところが、内容があまりに高踏だったため東雲堂と意見が対立し、この仕事を投げ出してしまった。その結果、白秋一家の生活は窮乏した。父親は怒り、「貴様のような奴は歌詠みなんかやめて、車曳きにでもなれ」と歎じた。もともと、長男が文学の道に進むことに反対だった父親としては無理もない。

父親と弟の鐵雄は、魚の仲買いを始める。三崎でとれたイカを日本橋の問屋に運ぶ。しかし、素人の商売がうまくゆく筈もない。「インチキなブローカーに騙されてしまう。

ある時はおのが家内（やうち）を盗人のごとく足音（あのと）をぬすみてあるも

は、家族のなかでも肩身の狭い思いをしている白秋のつらい心情吐露だろう。あるいは、鬼気迫る逸品。

憤怒（いきどほり）抑えかぬれば夜おそく起きてすぱりと切る鮪かも

姦通罪事件によって家族に迷惑をかけた。長男として親の期待に答えられない。さらに苦労の果てに結婚した俊子との仲もうまくゆかなくなる。俊子と白秋の家族の関係もとげとげしくなる。そうした心労が重なったうえでの「憤怒（いきどほり）」

だろう。
　結局、三崎移住後、約四カ月で両親たちは東京に帰ってしまう。白秋と俊子だけが残るが、翌大正三年に小笠原で惨憺たる生活をしたあと、二人も東京に戻り、その年の七月には離婚してしまう。

　ここで、小笠原生活について、もうう少し詳しく見ておこうと思います。

　大正三年（1914）三月、白秋は思い切った行動に出た。三崎での生活を切り上げ、「絶海の離島」、小笠原諸島の父島に渡ったのである。東京から直線距離にして千キロを越える。現在でも船で一昼夜、二十五時間半かかる。江戸時代末期までは無人島だったところである。
　そこに妻俊子と、それに三崎で知り合った藤岡伊和、加代という姉妹と四人で渡った。生活の不便が予想される離島へ、三人の女性を連れて行く。無謀である。
　俊子は肺を病んでいた。藤岡姉妹も薮田義雄『評伝　北原白秋』によれば、やはり肺を病み、病気療養で三崎の寺に滞在していた時に白秋と知り合い、白秋夫妻の小笠原行きに同行したという。
　それにしてもなぜ小笠原だったのか。
　暖かい島での三人の病気治療がまず目的だったろう。人妻との姦通事件で受けた痛手を、自分のことなど誰も知らない遠隔の地に行って癒やしたいという思いもあったろう。あるいは、経済的にも追い詰められていた身には離島での生活は金がかからなくてすむという判断もあったかもしれない。
　そして何よりも、三崎で海からの光の恩寵を受けた白秋は、より南の小笠原でさらなる明るい光を夢見たことだろう。光あふれる南方楽園に行けば、事件の痛手から回復し、再生出来るかもしれない。いわば、背水の陣を敷いてのぎりぎりの希望への旅だった。

　小笠原諸島は、大航海時代にスペイン、オランダによって存在が知られていた。近世に入るとイギリス軍艦が文政五年（1822）に父島に上陸、イギリス領を宣言。さらに文政三年（1830）には、ナサニエル・サヴォリーというアメリカ人が、サンドウィッチ諸島のカナカ人を連れて、父島に入った。これが最初の入植者という。
　白秋の小笠原についての随筆を読むと、島のあちこちで黒人や白人に出会って驚く様子が記されているが、黒人や白人の存在はこうした事情による。嘉永六年（1853）にペリーが来島するのも、彼らにはそこがアメリカの植民地という意識があったからである。

白秋は「小笠原島夜話」の中で、その後の日本統治によって「一種の極楽島」だった小笠原がすっかり破壊されてしまったことを嘆いている。

しかし、それは島に行ってわかったこと。行く前は、白秋の頭の中で小笠原はまだ南の理想郷だった筈だ。だから行ってみての現実と夢の落差に驚くことになる。

「「聞いて極楽、見て地獄」と申しますが、決してああいふ離れ島などへ内地の人が、永く住めるものではありません」

事実、島の生活は困難を極め、三月に島に渡ったものの、四月には藤岡姉妹を本土に帰し、六月には忍川春浪が島に渡ってきたので彼に頼んで妻の俊子を帰す。白秋ひとりがなんとか島にとどまる。

この頃作られた白秋の短歌を紹介しましょう。

あるかなく行きて残れば荒磯辺(ありそべ)や俊寛ならぬ身は痩せにけり

愛妻(はしづま)を遠く還して離れ嶋に一人残れば生ける心地なし

小笠原三界(さんがい)に来て現見(うつしみ)やいよいよ痩せぬ飯(いひ)は食(は)めども

藪田義雄は「あきらかに小笠原渡海は失敗だった」と結論づけている。白秋自身、こんな回想を残している。

> ゴオガンの『ノアノア』、あの原始的激情と素朴なる而も深厳なる美と神秘の生活、麗光異香、南海の情痴、私の小笠原渡海の憧憬と幻想とは、現実に於て見事に破られて了った。泣けも笑へもせぬ。泣くにはあまりに極楽であり、笑うにはあまりに地獄であった。そのさびしさ。それでも矢つ張り生きてゐなければならなかった。

2－（3）小笠原体験と再生の契機

だがしかし、小笠原行きは、白秋にとってただ「失敗」だけだったのだろうか。白秋はただ、「人情は冷酷　金はなし」に打ちのめされていただけなのだろうか。

どうもそうではないようだ。一方で白秋は確かに島の生活を楽しんでもいた。

島から東京に戻ったあとの大正四年（1915）から七年にかけて、白秋は小笠原での暮らしの思い出を書く。「小笠原島夜話」「油虫」「正覚坊」「小笠原の夏」「黒人の夢」「正覚坊と禿」の計六篇。そこには随所に「極楽」としての小笠原島が描かれ、読者を明るく、おおらかな気分にしてくれる。

実は私はこれまで白秋の小笠原体験は五ヶ月ほどの短いものだったし、結果として「失敗」だったからさほど重要視していなかった。しかし、「小笠原小品」と呼ばれるこれらの小品を呼んでみて、考えを改めた。実に面白いのだ。

ここには、詩集『思ひ出』で成功した華やかな白秋も、人妻との「姦通」によって世の指弾を受け、打ちのめされた白秋もいない。あるいは『邪宗門』のきらびやな人工言語を駆使した白秋も、『東京景物詩』の都会的でメランコリックな白秋もいない。

明るい太陽を浴びて浜辺で裸になって戯れる子供のように無邪気で、健康的な白秋がいる。東京から千キロも離れた「絶海の孤島」では、もう見栄も気取りもいらない。世間の気兼ねもない。島の人々は、白秋の事件どころか、白秋その人が何者かもよくは知らなかっただろう。

その「極楽」の中に無垢な少女が現れる。「リデヤ」という、おそらくはアメリカ人かイギリス人の女の子である。いわゆる帰化人の娘である。

白秋が「リデヤ」という少女に会ったのは、島に着いて三日目のことだったという。砂浜に曳き上げられた独木船（カヌー）に並んで腰をかけた。少女が聞く。「お前の名は何ていふの」。白秋は思わず答える。「北原白秋」ではなく、「Tonka John」（＊筆者註：柳川方言で良家の坊ちゃんを指す。白秋は詩作では幼時の自分をそう呼称していた）と。女の子が応じる。「Tonka かい。妾（あたい）の名は Rydia」。現代風にいえば、ここで、白秋と女の子のあいだに、国境を越えた「ボーダーレス」な親愛の情が生まれている。

浜辺であった女の子「リデヤ」は、無邪気にいう。「遊びにおいでよ、妾（あたい）んとこに白い鶯鳥（がちょう）が居るよ」。そのあと、白秋はこう書く。「それからこのリデアとトンカジョンは、大の仲善しになった」。

このくだりを読んだ時、正直、読者として涙を禁じ得なかった。東京で成功し、そして「姦通事件」によってそれまでの幸福を一気に失い、友人たちも失

い、一人ぼっちになった白秋が、東京から遠く、遠く離れた小笠原で、ひとりの少女に慰められてゆく。
　このあと、白秋が童謡の世界に入ってゆくひとつのきっかけは、小笠原で出会ったこの「リデヤ」という少女の存在ではなかったか。
　さらにもうひとり、小さな男の子がいる。

　白秋は小笠原のトマトが気に入った。「小笠原のトマトは殊に新鮮でまるで鶏肉（かしわ）」のような味がする。（略）だからトマトばかり買い込んでいる」。

　小笠原特有の赤土が、「まるで鶏肉（かしわ）のような味」のおいしいトマトを育てる。赤土と赤いトマト。白秋の好きな「赤」という色が、海の島で鮮やかによみがえっている。
　そして、白秋はある時、島で赤に彩られた無垢な光景に出会う。とある人の気のない山坂を登って行くうちに、急に折れ曲がると、思いがけず鮮烈な「赤」が目に入った。
　向こうから、赤いトマトを竹の籠に山盛りにして、両手でかかえ、よちよちと歩いてくる六歳ぐらいの子供だった。白秋はその姿に感動する。

　　その子供の神々しさ、まるで頭から御光（ごこう）がさすかと思つた。思はず掌（てのひら）を合せたが、あれこそ仏の童子というのだろう。それほど天上の光が強く、トマトが燃え上がってゐたのだ。（「小笠原の夏」）

　ここでも、白秋は子供のなかに「無垢」を見いだしている。
　今日、「無垢」という主題には、シニカルに「そんなものは大人の子供に対する幻想さ」という言説が付き纏っている。しかし、白秋時代には、「無垢」は、それこそそれまで誰もいっていなかった文学上の大きな主題だったのである。白州は、小笠原でおそらくはじめて、その「無垢（イノセンス）」を見つけた。

　白秋の小笠原での生活は、たしかに、薮田義雄のいうように「失敗」だったかもしれない。現実レベルの話でいえば、そのとおりだろう。しかし、「現実」とは違う「幻想」の世界では、白秋は、故郷の柳川とも、東京ともまるで違う、小笠原という異郷、一種のユートピアで、それまでとは違う詩的言語を獲得したのではなかったか。通常の人間がマイナスと見るものを、美的に肯定してし

まう大胆な視点を獲得したのではなかったか。

小笠原から東京に戻ったあと、「島から帰って」という小文のなかで白秋は書いている。

「悠々自適の簡素な生活をしていた。私の霊は益洗礼され、私の肉体は益健康になった」「父島滞留の半ヶ年がどれほど私を赤裸々にし人間らしく大胆に純一に真実にさして呉れたか、それは私の近作を見て下すったらわかる事と思う。何事も仇ではなかった。禍が禍でなかった。この一二年間の甚大な心霊の苦しみが今こそ私に一点の白金光を与へてくれたのである」。

白秋の小笠原行きは、決して「失敗」ではない。明らかにここには、世間をもう意識することなく、我が道を往くと固く決意した強い白秋がいる。

2－（4）小笠原と「追分」「びいでびいで」

詩集『思ひ出』の成功以降、「姦通罪」事件による失墜、そして、三崎での隠遁生活、小笠原移住と、白秋の足跡を追ってきました。

最後に、今回取り上げた「追分」と「びいでびいで」について触れておくこととします。

この 2 篇の詩は、ともに、大正 3 年（1914）の小笠原移住の 8 年後、大正 11 年（1922）に出された詩集『日本の笛』に所収されています。

この詩集中の「パパヤの花」という詩群には、この 2 篇の他にも「小笠原群島」「南の海」「南海の恋」「嶋のあひびき」「今俊寛」「待てば海路の」「椰子の薄黄の」等々、小笠原生活の回想からイメージされたと思われる歌が数多く含まれています。

また、この詩集の冒頭には「民謡私論」という一文が置かれていることからも分かりますが、この頃の白秋の詩は日本の伝承歌謡形式に軸足をおく作風に傾斜しています。

もともと白秋の詩は七・五調、或いは五・七調の定型詩をベースにしているといえますが、どん底から這い上がり、蘇ろうとする時、それ以前の自らの詩スタイルを脱皮すべく彼が立ち返ったのは、日本の伝統的民衆歌謡のスタイルでした。

この詩形式を、「追分」と「びいでびいで」を例にしてみてみることにします。

まず「追分」の詩の音節数を見てみましょう。

前節「誰が吹くのか　月夜の島に　一人ほそぼそ　一節切（ひとよぎり）」は、

「七・七・七・五」の音節になっています。

後節「椰子の花咲く　南の島に　忍路高島（おしよろ　たかしま）　北の雪」もまた、

「七・七・七・五」の音節です。

次いで「びいでびいで」はどうでしょうか。

前節「びいでびいでの　いま花ざかり　赤いかんざし　あけのきり」

「七・七・七・五」

後節「びいでびいでの　あのはなかげで　なんと仰った　末かけた」

もまた「七・七・七・五」となっています。

いずれの詩も「七・七・七・五」という音節数によって成り立っていることがわかります。

この「七・七・七・五」という詩形式は、「近世小唄調」と呼ばれるもので、江戸時代に入って定着したとされる民衆的歌謡形式なのです。

江戸時代に編纂された『山家鳥虫歌（さんがちようちゆうか）』という歌集があります。これはその当時、日本全土で歌われていた、膨大な数の盆踊りなど民衆歌謡の歌詞を、各地域ごとに集成した貴重な書ですが、ここに掲載された民衆歌謡の歌詞は、すべてこの「七・七・七・五」という詩形式で書かれているといって間違いありません。

それでは、実際に今日も歌い継がれている日本民謡の歌詞を、身近な例を取り上げて見てみましょう。

私はかつて愛知県北設楽郡の盆踊り歌を調査しましたが、その中でもっともポピュラーな歌に「高い山」があります。歌詞は次のようです。

「高い山から　谷底みれば　瓜やなすびの　花盛り」

音節は「七・七・七・五」です。

この歌詞は前記『山家鳥虫歌』にも含まれており、全国各地で歌われた歌詞です。私は昨年、長野県下伊那郡新野の盆踊りに参加してきましたが、そこでも歌われていて、今日でも各地で歌い継がれている歌詞です。

もう一つ。みなさんご存じの盆踊り歌「郡上節」を見てみます。

「郡上の八幡　出てゆくときにゃ　雨も降らぬに　袖しぼる」

これもやはり「七・七・七・五」調です。

このような例は上げればいとまなく、この「近世小唄調」は、今日でも日本

の民衆に広く、そして深く、愛されている曲調であることが分かります。
　この脈々と日本の民衆の中に生き続ける歌謡形式。ここに白秋は立ち返る。彼自身と、そして、彼の詩の再生の根っこに据えて。

　最後に、二つの歌の詩のイメージを、小笠原との関わりの中で読み解いておきましょう。

「追分」
　椰子の茂る、灼熱の南の島。その月夜に尺八の音が流れる。男が吹くのは、北海道の民謡「江差追分」。

「忍路高島(おしょろたかしま)およびもないが　せめて歌棄磯谷(うたすついそや)まで」。

　にしん漁のため極寒の地忍路高島へと出稼ぎに立つ男と、女人禁制の地であるために手前の歌棄・磯谷までしか行けず、そこで見送る女との、せつない別れの恋唄。
　南の亜熱帯の島と極寒の北の国という鮮烈な対比により、激しい望郷の思いを際立たせます。

　自らを、「今俊寛」として流刑地に送られた俊寛に譬えた、白秋自身の小笠原体験があればこそ生まれた歌と言えましょう

「びいでびいで」
　「びいでびいで」は、ムニンデイゴという小笠原諸島固有種の木の小笠原方言による呼称です。沖縄のデイゴと同系種とされる南方系固有種で、春には赤い花が咲きます。

　その花の下での出会いと別れ。明るい陽光(ひかり)の下の可憐な初恋の思い出を歌います。実らぬ恋の切なさを滲ませて。

　赤いびいでびいでの花を髪に飾る少女。そのモデルは、あのリデヤに違いないと私は考えています。

＜続く＞

多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる創作曲をめざして

これは、Agora 32 号掲載の追加分です。

縦書きで投稿されたものを含め全て横書きで記載しました。短歌中に明確なスペースや句読点が表記されているものはそのままにしました。

短歌の前段の＜　＞内に最小限の前書きを記載しました。

〇TI　豊田 滋夫

＜妻 恭子さんとの合作＞

ごつごつと節くれ立ちし我が指は　シベリア帰りの父に似たるか

スピーカーのボリューム上げて妻と観る　サスペンスドラマいよよ終盤

俳優の名前言うのもボケ防止　テレビを観つつ確認する癖

下戸我の今頃覚えし赤ワイン　極小グラスに3センチほど

マスクして朝の散歩は野球帽　背筋伸ばせば若く見えるか

若見えは一に体型二に姿勢　三四がなくて五に姿勢

〇池田 美恵子（団外の方）

＜B2 酒井さんより＞

老いに向かい段々小さくなる私　懐（ふところ）だけは深く大きく

地下鉄に席ゆずらるること多し年相応に人は見るらし